

# N T R T u b e

↳超人気イケメン〇〇チューバーに

大喜びでパコられた彼氏持ちJD・JK↳

犬文庫 023

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。

また、登場人物は全員十八歳以上です。

## 第一話

こんな俺にも彼女がいる。名前は敦子。一言でいうとオタク系だろうか。前髪パツツンの黒髪ロングヘアは毛量が多く、どこか垢抜けない感じ。地味な眼鏡で、ややぽっちゃり(その分おっぱいは大きい)。ゴスロリ系の服をたまに着たりして、俺同様アニメとかも結構好きだ。大学生カップルだけどインドア派で、あんまり派手に遊んだりすることはなく、いつも二人でのんびり過ごしていた。

そんな彼女とある時、イヌチューブの話になった。イヌチューブとは誰でも簡単に利用出来る動画投稿サイトのこと。動画投稿者はイヌチューバーと呼ばれ、有名人気イヌチューバーは

カリスマ的に崇められたりして、スマホ世代の若者達から絶大な支持を集めている。中には広告収入によって莫大な富を手にする人もいるらしい。

だが、公序良俗に反する動画を投稿するイヌチューバーも少なくなき、社会的に問題視されているのもまた事実だった。俺はこの文化自体に疎く、正直なところあまり関心はないのだが、流れの中でそんな話題になったのだった。

訊いてみると、敦子も今時の若者らしく、それなりにイヌチューブを見ているとのこと。中でも、特に好きなイヌチューバーがいるらしい。

「犬ブラザーズっていうの。男の子二人組の。ついでだから優太もチャンネル登録しといてくれる？登録者数は少しでも多い方がいいから」

今時女子の中には、イケメンイヌチューバーをアイドル視してキヤーキヤー夢中になる子

も少なくない。敦子もその感じなのか。少しがっかりしつつも、俺は彼女と別れた後、とりあえずそのイヌチューバーの動画を見てみることにした。しかし。

「…ん？」

件のイヌチューバーのチャンネルに並んでいる動画のタイトルからして、既に異様なのだった。すこぶる低俗で、性的な内容を連想させるタイトルばかりなのだ。

「……………」

敦子はこんなものを見ているのか。辟易しつつも、俺はとにかく一番新しい動画、『人気イヌチューバーは街で出会ったファンの女にどれだけエロいことを出来るのか!』を再生した…。

『どうも犬ブラザーズのガゼルでえす!』

『ジギーでつす!よろしく!』

スマホの中に登場したのは、派手な赤い髪と青い髪の二人組だった。二人とも毒々しい色の

髪を、雄々しい感じでツンツンに逆立てている。

「…なんだこいつらは」

その見た目の時点で、俺はもうダメだった。こんな非常識な髪色の連中なんて、俺の一番嫌いな人種に違いないと断じた。さらにムカつくことに、その二人、大変イケメンなのである。赤髪のカゼルは勇猛さ漂う感じの濃い男前で、青髪のジギーの方は鼻筋が綺麗に通ったどこか中性的な美形である。

「…敦子の奴…こんな男がいいのか…」

俺はがっかりせずにはいられなかった。がっかりというか、嫉妬、敗北感なのかもしれないが…。

『さあ、カゼル！今日はなにすんのさ？』

『いやさ、ジギー。俺達ってさあ…若い女にモテモテじゃん？』

『自分で言うのかよ(笑)！』

『いやいや…ぶっちゃけ俺もお前もフアンの

女食いまくってるじゃん？』

『おいおい！言うなって！炎上しちゃうよ  
(笑)！またアンチにめっちゃ叩かれるよ  
(笑)！』

「……………」

まず、会話が全然面白くない…。

『ぎやはは！そんなの今更気にしてもしょう  
がねえだろ！とにかく事実として、俺達犬ブラ  
ザーズには若い女のファンが死ぬほどいる。ホ  
ントマジで死ぬほどいる。それも簡単に股開い  
てソツコーでヤラせてくれるような超親切な  
女のファンがな(笑)。だから今日は夜の繁華街  
に女のファンを探しに行つて、そいつらがその  
場でどれだけエロいことをさせてくれるか、実  
験しようつてわけ』

『にやはは！やっぱあく！これ炎上確定動画  
だよ！』

『ふふっ！そんな訳で、今日はこの動画の中で

街で出会ったばっかのファンの女に軽うく  
メチャメチャエロいことすつから！アンチの  
バカども！指咥えて悔しがれよ！ぎやはは！』  
『あはは！じゃあ行きますか！』

「……………」

俺は唾然としていた。この犬ブラザーズとい  
う二人組…。正に問題視されているイヌチュ  
ーバーそのものなのだった。俺はそういう奴等が  
いることを噂で耳にしていただけで、きつと不  
快になるだろうから実際に見たことはなかつ  
たのだが、本当にこういう連中がいるなんて。  
多くの少年少女達も楽しんで利用するイヌチ  
ューブで、平気でこんな常識外れをする神経が、  
俺には信じられなかった。

さらにショックなのは、敦子がこのイヌチュ  
ーバーのファンだということだった。彼女だか  
ら、基本的な感性は同じに違いないと疑いなく  
信じていたが…。

「なんで…なんでなんだよ…敦子…」  
胃がキリキリと締めつけられた…。

『どうも！大人気イケメンイヌチューバー  
犬ブラザーズつすよ！注目してくださいあ  
い！ぎやはは！』

『僕達のファンの女の子いませんか？いた  
ら出てきてくださあ！エロいことしてあ  
げちやうからさあ！』

夜の繁華街を堂々闊歩しながら、大声で呼び  
かけてまわる二人。そこには気後れも羞恥心も  
寸毫見られなかった。本当に非常識な連中だ…。  
『あ…い…犬ブラザーズさん…わ…私…大フ  
アンです…』

『お、いいね♪おいでおいで』

動画の中、彼等の前に一人の女の子が現れた。  
大学生くらいだろうか。短い黒髪で、服装的に  
も大人しそうな雰囲気の子だった。そして目と  
その周辺にだけ、巧みにモザイクがかけられて



いた…。

女の子は促され、道の真ん中でカメラに正面  
向いて立った。その両隣にガゼルとジギーが彼  
女を挟んで立つ映像になる。

『ふはっ！俺達のファンなの？』

『は…はい…だ…大ファンなんですう♥ああ  
あ♥』

女の子は潤んだ声を出す。モザイクの下の表  
情もうつとりした様子。街で偶然有名イヌチユ  
ーバーと遭遇して、さぞかし感激しているのだ  
ろう。

『サンキュー！じゃあさ、キスしていい？』

「！！！」

とんでもないことを平然と尋ねるガゼル。

『ええっ！』

当然驚く女の子。

『ふふ、今日そういう企画なの！街で出会った  
ファンの女の子にエロいことさせてもらう企

画！今そういう動画撮ってんの♪』

今度はジギーが説明する。

『はあ…そ…そうなんですか…』

『だから頼むわ、キスさせて！』

『お願い、お願い！顔はモザイクでわかんないようにするからさ！』

『はあ…ほ…ホントにするんですか…？』

『うん！君メツチャ可愛いから、もう俺達、君とキスしたくてたままないの！もう既に勃つてんの(笑)！』

『そうそう(笑)！ね、いいでしょ？』

『はあ…じゃ…じゃあ…わ…わかりました…』

「！！！！」

衝撃だった。女の子はあまりに呆気なく承諾したのだ。なんで今さつき会ったばかりの男とキスなんて出来るのだ？しかも、こんな大人しそうな子が…。

と、そんなことを思っているのも束の間。

『オツケー！じゃあいただきます！ぶっちゅ  
ううううう！！！！』

「！！！！！！」

承諾を得るなり間髪入れず、ガゼルは女の子の顎を乱暴に掴み、いきなり強引な口づけをしたのだった。

『きゃうん！んん…ん♥』

『ふふ！べろべろべろべろれろれろ！』

『んん♥ん…んっ…んん♥はあ…れる…える』  
「ああ…」

俺は愕然としていた。ガゼルは躊躇うことなく舌をガンガン入れていた。口内を荒々しく蹂躪する。そして女の子はそれを拒まない…。

『べろべろれろれろ！…ぷはっ！にひひ！街でたまたま会ったフアンの女の口！超美味え！超デリシヤス！ぎやはは！』

『はあ…ああ…ん…ゴクツ』

『ふふ♪ほら、休んでる暇ないよ。次はこつち

だよ♪それっ！ぶっちゅうううう！！！！』

『んんん！ああん♥んんっ！』

「くっ…」

ガゼルから解放された女の子は、矢継ぎ早に今度は反対側のジギーに顎を掴まれ、無理矢理そちらを向かされ、またしても強烈なキスをされた。

『れるれる！ねちゅねちゅ！ねちゅれるねちゅれるれる！』

『はあん♥ああん♥…ん…ねちゅ…れる…ん♥』

『ねちよれるれるねちよ！ぷはっ！あはは♪』

ガゼルよりも舌と唾をねちっこく多用した、いやらしいディープキスだった。この女の子は、会ったばかりの男二人と、立て続けにキスをしたことになる。なんと卑猥で放埒で背德的なことだろう。彼女はいるとはいえ、至って性に奥手な俺には、眩暈さえ覚える光景だった。

だが、それだけでは終わらなかった。

『ぎやはは！じゃあ次はガゼルとキス！それっ！べろべろべろべろべろ！』

『ふうん！んん！…べろ…えろ…』

『にやはは！ガゼルの次はジギーとキス！うりや！ねちよねちよえるぬちよぬちよ！』

『きやうん♥んん…ねちよ…ぬちよ…ん』

『ガゼルとキス！べろべろべろべろ！』

『ん…れる…えろ…べろべろ…』

『ジギーとキス！ねちよねちよぬちよれる！』

『くうん♥ねちよれる…ぬちよれる…』

「……………」

ガゼルとジギーは、十秒単位くらいで次々交互に顎を掴み、何度も何度も連続で女の子に濃厚なキスを浴びせていったのだった。二人の男とハレンチ極まる連続キスをする彼女の顔が、モザイクで目は見えないとはいえ、しっかりと動画に映される。

強く顎を掴まれ、交代で好き勝手に口を犯される…。二人の男に、まるでおもちゃのように弄ばれる…。そんな恥ずべき姿を、彼女は動画として全世界に晒されているはずだった。

が…。

『んん…べろべろ…ああ…ガゼル様♥…べろべろ…んんん！ん…ねちよれろ…ねちよれろ…ん…ジギー様♥…ぬちよえろ…』

モザイクで目を隠されたその女の子の表情は、確かに嬉しそうなだった。赤らんだ頬に、溢れんばかりの昂揚感・幸福感が滲み出ているのだった…。

「……………」

そこに、俺には全く理解出来ない世界が広がっていた…。

『ぎやはは！じゃあまたね！』

『はあ…はい…失礼します…はあ♥』

女の子は夢見心地のとろけた顔で、夜の街へ

消えていった。ちやつかり二人と連絡先を交換してから…。

「……………」

なんとも言えない気分だった。これは一体なんなのだろう。この現実を、どう捉えればいいのかだろう。そんな茫漠たる心理に苛まれていたが、動画はまだ続いていた。さらなる衝撃の世界に、俺をいざなった。

『はいはい！私も！私達も大ファンです！』

『うん！うちらも犬ブラザーズ大好き！』

動画の中、連中の周りにはいつの間にか人だかりが出来ていた。その中から、二人組の女の子が進み出てきたのだ。今度は顔にモザイクはかかっていたなかった。どちらも頭髪を派手な茶色に染めた、見るからに遊んでそうなタイプの女の子達だった。服装も露出過多でスカートも短い。そしてさっきの一部始終を見ていたらしいということとは、動画の企画意図を理解した上

で自ら名乗り出たということになるが…。

「…ゴクツ」

『ぎやは！マジ？ようこそようこそ！じゃあ大好きな犬ブラザーズ様にエロいことさせてくれんの？』

『あは♪うん！いいよお〜♥もう余裕でエロいことしちやってえ〜♥』

『うんうん！全然ええで♥遠慮せんとうちらの体にエロいことしたってや♥』

「！！！！！」

二人の女の子は、一切躊躇することなく、あつけらかんとそう言つてのけたのだった。

さらに…。

『ぎやはは！じゃあ遠慮なく！おらっ！』

『あは♪それえっ！』

『あっ！きやつ！』

『きやあああ！』

「！！！！！！！！！」



ガゼルとジギーは、すぐに行動に移った。それぞれ女の子の背後に回り込むと、宣言通り遠慮も配慮もなにもない野蛮な動作で、いきなり後ろから両手で胸を鷲掴みにしたのだ。

『ぎやはは！おらおらおらおら！』

『にやは♪おっぱいもみもみく♪』

『はああん♥ああ、あは♪やばい(笑)！これやばいって(笑)！きやはは！』

『ああ♥あは！ウケる！めっちゃおっぱい揉まれてるし！あはははは！』

二人並んで後ろからガシガシ両胸を揉まれまくる女の子達。その様子がバツチリ真正面からカメラに捉えられる。とんでもない姿態を動画としてこうして流されている。しかも今度は顔にモザイクもない。

ところが彼女達は、なんら尻込みせず、堂々と胸を揉まれていた。全く抵抗しない。それどころか、明らかにとても嬉しそうなのだ…。

「……ゴクリ」

『あはは♪やばい！マジこれやばいよ(笑)♪  
きやはは！ああん♥』

『あ♥はあん♥あははは！犬ブラザーズに揉  
まれてる！めっちゃ揉まれてるやん(笑)！』

愉快そうに笑う二人はだらんと両手を下ろし、本当にされるがままだった。完全完璧に背後の男達の好きにさせていた。有名人気イヌチユーバーに、喜んでその体を捧げていた…。

「…はあ…ああ…」

『ぎやははは！いいねえ！お前らノリ最高！  
じゃあいいよな！もう顔モザイクなしでこの  
動画公開してもいいよな！』

『ああん♥きやは♪うん！いいよ！そんなの  
全然いいよ！モザイクなんてかけなくて全然  
平気！超平気(笑)！』

『うん♥犬ブラザーズの動画に顔出しで出れ  
るなんてむしろ光栄やわ！あはは！ああん♥』

『ぎやは！すげえこいつら！じゃあ大好きな犬ブラザーズ様におっぱい滅茶苦茶にモミモミされながら！カメラに向かってダブルピース！はいっ！イエーイー！』

『あは♪いえくくい♪』

『きゃはは♥イエーイー！ぴーすぴーす☆☆☆☆』  
「！！！！！！！！」

俺は呼吸を忘れた。動画の中、ガゼルに促された素顔の女の子二人は、後ろから滅茶苦茶に乳房を揉まれながら、カメラに向かって嬉しそうに、両手で大きくピースサインを決めてみせたのだった。

「…はあ…ああ…」

あまりにハレンチな光景だった…。

『ふふ…じゃあそのポーズのまま、しっかりカメラ目線でこう言ってごらん…』  
『…』

ジギーがなにやら二人に耳打ちする。

『へ？：あは♪やつぱ(笑)！ふふ：い：いえ  
ー！い！ぴーすぴーす！私達！ただいま！大  
好きなイケメン有名イヌチューバーさんに！  
おっぱい揉まれちやつてまあ〜す♪』

『きやは♥お：お父さあ〜ん♪お母さあ〜ん  
♪見てるう〜♥あは♪二人の大事な娘は！た  
だいま！自ら喜んで超人気イヌチューバーさ  
んにおっぱい揉ませちやつてまあ〜す☆  
☆☆お：親不孝娘でホンマにごめんやでえ〜  
〜♥ぷっ！ウケる！マジこれクソウケるわ  
(笑)！はははは！』

「ぐっ！」

『ぎやははは！うえー！い！俺達今！街で  
偶然会ったフアンの女のおっぱい！余裕でモ  
ミモミしまくつちやつてまあ〜す！もみも  
みもみもみ！もみもみもみいい！げははは  
☆☆☆』

『にはは！僕達こんな動画ばっか作って！去

年の年収！なんと八千万円どえくす☆ごめんなさあ〜〜い♪ごめんなばあ〜〜い♪はいはいばあ〜〜い♪あははははは！』

自らの両手で乱暴に胸を蹂躪するファンの女の子の肩越しに顔を覗かせ、カメラに向かって挑発的なセリフを放つガゼルとジギー。

「……………」

言葉が、出なかった…。

二人の蛮行は続いた。

『くくく…おりゃ！』

『にやは！そお〜〜れ♪』

ガゼルとジギーは申し合わせたように二人同時に、片方の手は胸をガシガシ揉んだまま、もう片方の手を女の子の股間に運んだのだった。そしてやはり一切遠慮なく、そこを激しく愛撫する。

『きゃあああ！ああ！やばい！それはマジやばいって！ガゼル！』

『きやつ！あかんあかん！あかんって！ま…マンコは！マンコはあかんって！』

『ひひ！んなこと言って！ホントは嬉しいんだろ！俺達犬ブラザーズにマンコ触ってもらって！ホントは嬉しくてしようがねえんだろうが！このクソバカファン女！おらおらおらおら！』

『そうだそうだ！素直になりなよ！それそれそれそれ！』

『あああん♥ああ、う……うん！嬉しい！ああん♥ホントは嬉しい！はあ！ああ！大好きながゼルに！ああ！お股まさぐってもらえるなんてホントは嬉しい！ああ♥なああ♥もう超嬉しい！』

『うん！ああっ！うちも！憧れのジギーにマンコ触ってもらえるなんて最高や！ああ！夢みたいや！ああ♥やばい！あかん！これあかんわ！濡れる！濡れるわ！これマジで濡れる

濡れる濡れてまううううう！！！！』

「……………」

あくまでスカートの上からだったが、二人は確かに彼女達の大事なところをしつかり刺激していた。俺はもはや馬鹿みたいに口を開けて唾然とするばかりだった。もう完全に、この現実についていけなかった。

やがて、二人に散々体を弄ばれたその女の子達は解放された。しかし、それで終わりでもなかった。驚くべき映像を俺は突きつけられることになる…。

『はいはいはいはい！私も！私も犬ブラザーズの大ファンです！』

『次は私！私にしてください！』

『私もおっぱい揉んでガゼル！マンコ触つて！パンツの中に手入れていいから！』

『キスしてええ！エッチなこととしてジギーいいい！』

『私も私もおお！！！』

「……なんなんだこれは」

一際大きくなった人だからの中から歩み出てきた女の子達がどんどん押し寄せ、挙って二人の卑猥な生贄に立候補しだしたのだ。

『ぎやはは！いいねえ！マジ超モテモテじゃん俺達！な、ジギー。俺の言った通りだろ？』

『あは、そうだね♪ふふ、ほらほら、焦らないで女の子達♪ちゃんと希望者全員のおっぱい揉んでマンコいじってあげるから(笑)♪』

『きゃーーーー♥♥♥』

『やったああ♥♥♥』

『犬ブラザーズ最高お〜♥大好きい〜♥♥♥』

「……………」

これ以上見てられなく、俺は動画を停止した。カルチャーショックだった。イヌチューバーというものは、一群の女の子達に、ここまで人気なのか。ここまで、出来てしまうのか…。



そして一群の女の子達の性観念は、ここまで、  
乱れきってしまったのか…。

動画の登場人物達は、みんな俺と同世代だった。けれど俺とはあまりに生きてる世界が違いすぎて、まるで宇宙人を目撃したみたいな体験だった…。

※※※※

「いただきます…ちゆるちゆるちゆる…」  
「……………」

目の前で、敦子がきつねうどんをすすっている。学食のテーブルで、俺達は向かい合っていた。今日のメニューのチョイスもなんだか敦子らしい。敦子はこんな風に地味で大人しい女の子なのだ。毛量の多い黒髪ロングヘアーは重た

い印象を拭えず、洒落つ気のない眼鏡も相まつて、全体的にはどこか暗い雰囲気も漂う。人によつては近寄り難くさえ思えるかもしれない。ややぽつちやりした体型でもあり、若者のメインストリームにいるような派手な女の子達とは、一線を画しているといつていいだろう。

「……なあ、敦子」

そんな彼女に、俺は言わねばならないことがあった。

「…え？……な……なに？」

「…こないださ……その……イヌチューバーの話……しただろ？」

「え？あ……そ……そうだったっけ？……あはは」

「うん……それでさ……お前の好きなイヌチューバー……犬ブラザーズ……だっけ……その動画見てみたんだけどさ……単刀直入に言うけど……ああいうのさ……もう見ないでくれない？……ダメだよ……あんなの見ちゃ…」

俺は敦子に正直に言った。いくら彼氏といえ、個人の趣味にまで口出しするのはよくないのかもしれない。だが、俺はもう絶対に嫌なのだった。彼女があんなものを見ているのが、どうしても許せないのだった。

あの動画に登場した倫理観の欠落した男達も、頭の悪いビッチどもも、反吐が出るほど嫌悪していた。いくら見ているだけといっても、大好きな彼女にはああいう世界に一切触れてもらいたくなかった。

ほんの少しでも嫌だった。これは俺の彼氏として絶対に譲れない一線だった。それをちゃんとして伝えなければならぬ。今日は喧嘩になるかもしれない。覚悟の上で、俺はこの時間に臨んでいた。

ところが。

「…うん…わ…わかった…：…優太がそう言うなら…もう見るの…やめるね」

あまりに呆気なく、敦子は承諾したのだった。それなりの修羅場も想定していたのだが、これには拍子抜けしてしまう。

「え？…いや…その…いいの？」

「…うん…優太がそう言うなら…私…見るの…やめる…」

地味で大人しい敦子とはいえ、絵に描いたような従順さに俺は戸惑っていた。決して自己主張がない子ではないのだ。なんでこんなに弱気なのだろうか？

「…そうか」

「……うん」

少し気になったが、なにより今はもう見ないと約束してくれたことをよしとすることにして、俺も自分の昼食に箸を伸ばした。

※※※

「うーむ」

風呂から上がりパジャマに身を包んだ俺は、ベッドに仰向けになって悩んでいた。

「…敦子のやつ…やっぱちよつとおかしかったよな…」

あの後ずつと、敦子はなんだか様子が変なのだった。やたら口数が少なく、なにかに怯えているというか、やけに申し訳なさそうにしているというか。そして講義が終わり次第、今日はもう帰ると逃げるように俺の前から去っていった。

そして考えてみるに、自分が彼女に伝えることで頭がいっぱいでスルーしてしまっていたけれど、その異変は例のことを伝える前から始まっていた気がするのだ。今朝顔を合わせた時から変だったようにも思える…。

「…敦子…なにか悩んでるのかな？…明日聞いてみるか…」

その時。

『プルルルルルルル！』

珍しい音が鳴った。スマホの、電話の着信音だった。最近では電話を使うこともめっきり減ったので、随分久しぶりに聞いた気がした。誰だろう。電話をかけてくるとはよほど急を要する用件だろうか。ディスプレイを見ると、同じ大学の友人、竹原だった。

「もしもし」

「おい優太！大変だぞ！今一人か？敦子ちゃんと一緒に？」

竹原は立て続けに喋った。やけに慌てていた。

「いや、一人だけど…」

「そうか。今一人なんだな？じゃあ、スマホでイヌチューブ見えるな」

「え？別に…見えるけど…なんで？」



「……………」

竹原との通話を終えた俺は、しばらく動けなかった。信じられなかった。現実を受け止められなかった。嘘だと思いたかった。だが竹原はこんなくだらない嘘をつくような男じゃない。けれど、勘違いという線はあるかもしれない。一縷の望みを胸に、俺は勇気を振り絞りスマホでイヌチューブを開いた。犬ブラザーズの動画を検索する。件の最新動画が出てくる。

「くっ…」

その動画のタイトル…。

『夜の街で今時女子の性の乱れを調査したらヤバすぎた(笑)!パコパコしまくりクソビッチ大量捕獲(笑)♪』

絶望感に苛まれるが、とにかく俺は動画を再生した。

『どうもく犬ブラザーズのガゼルですっ!』

『ジギーでえす!よろしく!』



相変わらず馬鹿丸出しの赤と青の髪の二人が現れる。ツンツンに立てたその髪が、とても挑発的に感じた…。

『今日はなにすんのさ、ガゼル？』

『おう！今日は夜の繁華街で、若い女の性の実態を調査しちまうぜ！』

『にやはは！これまた炎上動画の予感(笑)♪』  
『んなことねえよ！間違った性観念を持った若い婦女子がいたら、その場で説教して矯正してやろうっていう超優良企画だから！社会貢献だから、マジこれ！股ユルクソビッチ捕まえて出来れば今日の内にパコらせてもらおうなんてこれっぽっちも考えてねえから(笑)！』

『あはは！やっぱあゝ♪』

『じゃあいくか！がはは！』

「……………」

例によって低俗と下品を鍋で煮詰めたような動画だった。二人はやはりなんら気後れする

ことなく、堂々と夜の繁華街を練り歩き、気安く若い女の子に声をかけまくり、自分達の動画にガンガン出演させていった。

それは、俺にとって、目が眩むような映像だった…。

動画はインタビュー形式で展開した。

『それじゃあ、いくぞ！いいな！今言った通りにやれよ！』

『わかりました！』

『よっしゃ！ではいけ！カメラ見て！大声で！GO！』

『はい！私は今月！五人の男とセックスしました！きゃはは♡やばあ〜い♪』

連中には変なこだわりがあるのか、捕獲した女の子に、セリフのフォーマットを指定して、今月セックスした人数をまず告白させるという形を取った。そして五人目くらいの女の子からは、声をかけるシーンも、フォーマットの説

明をする場面も省略された。つまり、ある程度動画が進んでからは、スマホの中にパッと現れた女の子がカメラ目線で、

『私は今月！七人の男とセックスしちやいました！きゃはははは♪』

と突然告白する画が描き出されることになった。それは劇的に卑猥な映像に仕上がっていた。そしてその儀式を終えてから女の子への個別のエロインタビューが始まるのだった。ガゼルとジギーは一切遠慮せず一人一人に根掘り葉掘りねちつこく質問していった。どういう相手とセックスしたのか。どういう展開でセックスに至ったのか。何故そんな大勢の男とセックスすることになったのか…。

『まあ…合コンで…はい…そのまま…ラブホ行っちゃいました(笑)♥』

『クラブでナンパされて…彼氏はいるんですけど…ごめんなさい♪ホイホイついていっち

やって…パコりました♥』

『SNSで知り合って…うん…会ったその日にやっちゃったの♥』

『がははは！やべえだろ！マジやべえだろ！』

『あははは！日本ガチでビッチだらけ！この国もう終わりでしょこれ！』

「……………」

動画の中、どんどん入れ替わっていく女の子達は、皆自らのあられもない性体験をカメラに向かつて平然と告白した。顔にモザイクがかかっている子もいれば、かかっていない子もいた。かかっていない子は、モザイクをかけないで動画を公開することに合意したということだろう。素顔での赤裸々なエロ告白を世界中の人に見られても構わないと…。中にはモザイクなしで堂々浮気をカミングアウトする猛者もいた。

『タカくうくん♪真理奈ねえ、今月二人と浮気しちゃいましたあ〜♪今月タカくん以外の

二人の男と寝ちやいましたあく♪いえーい  
い☆☆☆あはは！やっべええ！！！！』

「……………」

無論編集されてはいるのだろうが、男達が言うように、揃いも揃ってゲスビッチのクズだらけだった。俺は下劣なインタビューを延々見せられた。頭が痛かった。吐き気さえ催していた。とはいえ、こんな奴等などどうでもいいのだ。こんなゴミども、俺の人生にはなんの関係もないのだから。

「……………敦子」

彼女さえ、この動画に出演していなければ、それでいいのだ…。

俺は敦子が出演していないか、動画の冒頭から具にチェックしていた。モザイクで顔を隠された子も、万が一敦子ではないか、しっかりと精査した。結果、ここまで敦子が出ていなかった。間違いなく、確実に出ていなかった。竹原

の見間違いだったのでは？そんな楽観的な気分も湧いてくる。動画の残り時間もわずかになる。尺的に後一人くらいか。それが敦子でなければセーフだ。やはり竹原の勘違いだったのだ。そして。

動画の中に、パツと、最後の女の子の姿が映し出された…。

「……え」

顔には目とその周辺を覆うようにモザイクがかかっていた。だがそれでもわかる情報がある。パツツンの前髪…。毛量の多い重たい黒髪ロングヘア…。モザイクの下うつすら見える飾り気のない眼鏡…。ややぽっちゃりした体…。見覚えのある可愛いゴスロリ系の黒基調のワンピース…。

そしてモザイクで隠されているとはいえ、数え切れないほど見つめたその顔…。

「……敦子」

思わず俺の口から、その名が出てしまっ  
た…。

間髪入れず、動画はフォーマット通りに進む。  
指示も説明もなにもない。それは編集で切られ  
たところで既に終わっているのだ。その女の子  
は動画に現れるなり、すぐさまカメラに向かっ  
て言葉を放つ。

『わ：私は今月！さ：…三人の男とセックスし  
ました！』

「なっ！！！！！！！！」

発言の内容も勿論だが、その声を聞いて俺は  
度胆を抜かれた。声は、全員一律で加工してい  
なかったのだ。もう間違いなかった。

それは、俺の彼女だった…。

「…敦子…なんで…」

『あははは！大人しそうな顔して、君、結構や  
ってるんだね♪今月まだ大分残ってるよ(笑)』

♪』

敦子の右隣に立った青髪のジギーが笑う。

『ぎやはは！俺の言った通りだろ、ジギー？この手の地味系女はたいてい裏でちやつかりやることやってんだって♪』

左隣に立った赤髪のカメルも同調する。カメラに正面向いてどこか恐縮した感じで立つ敦子は、両サイドを二人の男に挟まれていた。この形でインタビューを受けることになる。

『はあ…ああ…あはは♪』

いきなり不躰なことを言われているというのに、モザイクの下の敦子の顔は、どこか嬉しそうに歪んでいるように見えた…。

「…敦子…なんだよ…なんなんだよ、これ…」

心臓がバクバク暴れ飛び出しそうだった。頭の血管が千切れるかと思った。だがとにかく、俺は動画の成り行きを見守ることにする。

「くっ…」

『その三人っていうのはどういう男？内訳を